「教育実践研究指導センター紀要6　1996」

インターネット（電子メール）によるコミュニケーション活動の実践

―― グローバル・インターネット・E メイル・プロジェクトin Fuzoku JHS (GIEPF)：一年生の英語学習の実践を通して

A Practice of Communication Activity on the Internet(E-mails)
A Report of English Classes of the 7th Grade Students
Global Internet E-mail Project in Fuzoku JHS

渡　部　睦　浩

0. はじめに

テクノロジーの大きな変化は、激動する社会事情とも相まって加速的に世界の国々の距離を物理的に、また論理的に縮めた。またコンピューターによるネットワークの発展は、これまで国境という概念で仕切られてきた国と国との区別や、情報の伝達の仕方を変えてしまい、なかでもデジタルキャッシュという仮想的な貨幣の考え方や、新たな犯罪の形態を生みだした。特に情報が一部の機関や放送施設のみから得られるのではなく、誰にとっても公平にネットワーク上で提供される場合もあり、新聞やTVよりも時間的に速く、重大なニュースをインターネット上で知ることも出てきている。もちろん、誰にとっても公平とはいっても、情報が誰かの手によって二次元的に処理され、十分な情報機器が準備されている場合が物理的な条件であり、利用する側にも、様々なサービスを処理できるソフトが使えるようリテラシーが必要とされる。

インターネットを含め、コンピューター文化が大きく情報提供の場面や機会を変えた。これまで「情報を発信できること」は放送や書籍その他、様々な文化活動を通してであったが、一般的にみても、もっと容易で手軽に情報を発信していける時代が到来した。金銭的にも従来のメディアが必要とするコストから見ればかなり低コストで情報を発信できる。またその対象も、世界的な規模で行うことができる。

このような時代背景は、日々を生きていく上で新たな価値を生みだした。読み書きができることと同じくらいコンピューターなどの情報機器を利用することが自然なものとなってきている為である。教育の現場においても、新たな視点を考えることができるようになった。つまり、これまでの歴史的な事実、文化的な成果や科学的な事実を理解させること、様々な技能を習得させ豊かな表現力を生徒につけさせることに加え、生徒の表現した作品や考え方、学習活動そのものを世界へ発信していくことの有効性と必要性である。またインターネットの性格上、共通の言語は英語であり、英語による情報発信ができれば、数の上で、これまでとは桁違いの様々な人々に、日本の地方在住の中学生であっても社会的な影響を与えうるような活動が可能である。また日本国内の東京を中心とした中央、地方という考え方も、これからゆっくりと変わっていく可能性がある。英語圏でなくとも情報の受取り、発信は英語を中心として行われる。このことはこれまでなかなか目を向けることのなかった英語を母国語とする国々以外との交流の可能性も秘めている。

本校、英語科一年生の学習では情報発信の第一段階として、インターネット上でのE-mailの交換による国際交流を試みた。活動の中心をIECC（Ⅲで詳しく記述）とし、まずは交流校を探すことから開始した。以下、本年度の実践をもとに取り組んだ内容について記述していくこととする。

1. インターネット

インターネットとは何であろうか。最も簡単な解釈として「インターネットとは世界中の全てのコンピューターをつなぐネットワーク」と言うことができる（村井1995：2）。もちろん現在、全てのコンピューターが接続されているわけではなく、推定で1000万台以上のコンピューターがインターネットに接続されているとされる（村井1995：2)。インターネットに関して何台のコンピューターが繋がっているのかは正確な数字が分からない。村上(1994:3-4)にはインターネットについてさらに詳しい記述がある。それによればインターネットの正式名称はインターネットワークであり、独立に運営されているネットワークを相互接続したもので、全体があたかも単一のネットワークのように動作するのが特徴である。これが広義のインターネットであり英語ではinternetと小文字で綴る。一方狭義のインターネットの方はInternetと大文字で綴り、大学や研究所などの研究組織のネットワークを相互に接続した世界規模のインターネットワークのことである。

現在、島根大学教育学部附属中学校からは、一台のコンピューターからインターネットへ接続することができる（平成7年12月現在、ダイヤルアップのみによる接続)。現在9名の教官がアクセス権を島根大学から取得しているが、現在は実験的な段階である。

2. IECC

IECCとはIntercultual E-mail Classroom Connection の省略形である。これはインターネット上で国際交流をする際に相手を探す相手校探しに使われるメーリングリストのことである。朝尾(1995:89)に紹介されているが、メーリングリストとは「拠点となるメールアドレスを定めておき、ここにメールを送ると、そのグループに登録されているメンバー全員にメールが配信されていくしくみである」。ミネソタ州、St. Olaf Collegeが運営しており詳しい情報はhttp://www.stolaf.edu/network/ieccで見ることができる。

IECCに登録すると、様々な学校からの交流の申し出がE-mailによって発送されてくる。少なくても毎日10通程度は発送がある。各校が様々な立場からの国際交流を求めている。このリストに希望を載せる各校は、学校名、担当教員名、学習のねらいや、学校や担当している授業の規模、交流の期間、授業やプロジェクトの内容等についての情報を提供している。これを読み、希望が一致すれば、直接気にいった学校へE-mailで返事を出すことができる。

3. GIEPF

3.1. ねらい

GIEPFとはGlobal Internet E-mail Project in Fuzoku (JHS)の省略した語である。インターネット自体が世界的な規模のネットワークであるが、敢えてGlobalという語を使用した。

大きな狙いはE-mailを通じて、海外の生徒と本校生徒のネットワークを作り、英語による国際交流をしていこうというインターネット上のプロジェクトである。また情報を享受するのみではなく、自分達のこと、日本のことを発信していけるように将来的な活動も考えられる。

「英文を書く」という課題を与える場合、「誰」に向けて「どんな内容のこと」を書くのかという書く際の状況が、学習者の「書こうとする意欲」へ与える影響力は計り知れないものがある。すなわち、実際に伝えたいことがあって伝えたい相手が他にいた方が、学習者の英文を書こうとする強い意欲づけとなりうる。またその相手が現在学習しようとしている英語圏の文化事情を交流の際に紹介してくれたら、どんなに学習意欲が増し、また実際に学習効果があがるのではないだろうか。また今後、世界に自分達の情報を発信していく段階がくれば、E-mailを含めたインターネット上のサービスの利用は、学習の成果を大きくするものと考えることができる。

今回紹介するようなインターネットの電子メールによる文通に取り組んだのも、このような予想からである。では、通常の郵便による文通との違いについてもっと具体的な内容をあげて説明してみることにする。

3.2. E-mailによる交流の特徴

(1)交流相手の反応が速い。

E-mailをやりとりするようになると、一日一回程度は自分あてのたよりが届いているか確認するようになる。確認する期間／頻度については個人差があるであろうが、一日一回程度見ておかねば迅速な反応ができない。相手校の教科担当がIECCに入っている場合は交流を希望している相手へ連絡を取ることとなるので、翌日か、悪くても数日後には返事が来ることが多い。

(2)交流の相手の数が多い。

メーリングリストによる配信であるため、自分の学校の希望を読んでくれる人の数が多く、反応も迅速な場合が多いので交流の対象が拡がる。

(3)交流のためのコストが安い。

インターネットに接続されるまでの設備投資（コンピューター本体、モデム等の周辺機器や処理用の専用ソフト）がかなり必要ではあるが、文通の際のE-mail発送そのものに関しては電話代のみと考えて良い（ダイヤルアップ接続の場合)。もし専用回線をつなげばもっとコストダウンが期待される。通話時間も回線の状況や文章量にもよるが、数秒から数分で発送できる場合がほとんどである。

(4)発送までの手間が省ける。

コンピューターのある机から文章作成、発送までのすべてを終えれる。

(5)文字が手書きよりも読みやすく、解釈しやすい。

コンピューター上で作成されているため、読みやすく理解しやすい。

(6)文通の手紙（E-mail）を再利用しやすい。

E-mailを受信した時点で相手の文章内容はテキスト化されているので、再利用しやすい。返事を出すときも、相手の文章を全部／一部引用することが可能である。

(7)文通の手紙（E-mail）を管理しやすい。

通常、E-mailを管理するソフトウェアーは簡単なデーターベースとして動作する。これまで受信した手紙を、相手別や自分特有のカテゴリーを決めて分類し管理していくことができる。また簡単に情報の検索をすることができ、並んでいる順序を時間やタイトル別に瞬時に並べ変えることもできる為、資料としても再利用しやすい。

4. 指導の実際

4.1. 交流の手順

(1)手順A ：IECCを利用し、相手校を探す場合

1)IECCに教師のメールアドレスを登録する

2)IECCの交流希望の内容把握

3)相手校の教科担当へ連絡

4)相手から返事が来る

5)GIEPFの説明（授業時間を利用。ねらいや学習内容の説明）

6)生徒の文通希望相手の調査

7)本校生徒へ文通相手の紹介

8)コンピュータールームでの指導

ソフトウエアーの使いかた／E-mailの書き方

9)E-mailの発送

10)相手からの返事が来る

(2)手順B：WWWを利用する場合。

1)Yahoo（http://www.yahoo.com/)を利用し、WWW上に情報を公開している学校を探す

a) Education, K-12,等キーワードとなる項目をクリックし、情報を探す

b)英語教育の雑誌やその他の書籍で学校名が紹介されている場合、Infoseek等の検索用のホームページを利用し、その学校を探す

2)交流を希望したいWWW上のアドレスあてに交流内容と自己紹介を兼ねたE-mailを発送する

※WWW上に情報を公開する場合、そのページに作成者もしくは責任者のメールアドレスが書かれていることが多い

3)以下、手順Aの4)以降に準ずる

4.2. 解説

まずIECCに登録をし、どのような希望があるのかを把握する。登録の仕方は、E-mailをIECC-REQUEST@STOLAF.EDUあてに送れば良い。メール本文にはsubscribeとだけ書き、Subject(E-mailの表題にあたる部分）には何も記入しない（朝尾1995:89)。相手校の希望内容をしっかりと読み、こちらの希望と人数、内容が合致すれば返事を出す。相手からの返事

が来て交流の意志が確認されたら相手を交流校のリストに加える。今年度は一年生160名全員の為に文通相手を探したので相手探しに数ヵ月を要した。

その他国際交流の相手校を探す際に効果的なのは、WWW（World Wide Web）での相手校探しである。WWWというのはテキストに加え画像も発信できるインターネット上のサービスの一つである。ここまでインターネットが盛んになった大きな一つの要因であると言われているものである。交流校の中にはこのWWW上で学校の情報を提供している所も少なくない。探し方は至って単純であり、ブラウザと呼ばれるWWW上の情報検索ソフトを使用する。インターネット上の情報検索をするための大学などの検索専用のホームページやWWWの電話帳にあたるナビゲーターのページを利用できる。有名なのはYahooと呼ばれるページ（http://www.yahoo.com/)でカテゴリー別に情報を追いかけていけばよい。交流校を探す場合、EducationやK-12をマウスで選択（クリック）すれば良い。国別に検索することも可能であり、交流したい国を選択してからEducationを選択すれば、リンクの張られた中学校や高校のリストを目にすることができる。

WWWから情報を発信するためにはホームページと呼ばれるページを作成し、情報のリンクを作成すれば良い。このホームページに使用される言語はHTML言語（HyperText Markup Language: ハイパーテキストマークアップランゲッジ）と呼ばれ、自由に世界の様々なホームページにリンクを張ったり、写真や図を使用し、情報発信をすることができる(リンクを張る場合、リンク先の作成者または運営の組織団体の許可を得る方が良い)。

オーストラリアのReece High School のホームページ（http://web.reece.tased.edu.au/）を見ると、学校紹介や生徒の作成した俳句のページ（A section of Haiku Poetry)が用意されている。また普通では手に入りにくいThe 1995 Reece High School Student Handbook も用意されており、制服や校則についての情報が一目瞭然である。このようにE-mailでの交流に加え、ホームページを準備することは自分の学校の様子を理解してもらうのに大きく役立つ。またSchool Fairのホームページを見ると、面白い学校の行事の様子を写真で見ることができる。

アメリカ合衆国はオハイオ州のOxford Elementary Schoolのホームページには生徒自身のコメントが書かれている。生徒にこのホームページの内容をコピーしそれぞれの生徒あてに返事を書かせたことから、この小学校とも交流が始まった。

現在、本高の生徒にはそれぞれのアクセス権がない。したがって毎朝教員あての郵便受けに配送されてきた生徒あてのE-mailを確認し、印刷することが日課となる。またシステムがうまく作動しない場合や、不慮の事故に備え、できるかぎりE-mailのコピーを取って、コンピューター上と紙による二重の保管をしている。

もし今後20台から40台のインターネットへ接続できる情報機器が導入され、生徒それぞれにユーザー名とパスワードが与えられると、このような作業は最小減ですむであろう。但し、インターネット上の情報にはもちろん倫理上問題があったり有害な情報も存在する。しかもソフトウエアーやコンピューターの操作に慣れれば、いとも簡単にこれらの情報を目にすることができる。このことはインターネットへ生徒を自由にアクセスできる環境作りをしていく際に別の大きな問題となることである。

相手の見つかった生徒は、相手に対して個人的な内容の手紙を発送する。授業を全てこの文通の為に費やすわけにもいかず、コンピュータールームでの全体学習は4〜6時間のみであった。もっともワープロの保存、呼びだし、その他、ソフトウエアーの使い方に指導が終始してしまった生徒もいて、全体指導の難しさを改めて感じた。生徒はコンピュータールームが使用できる時間や各家庭での機器をうまく利用し、文章を作成していた。またできた手紙は○○○○ .TXTという名前をつけるとり決めをし、複数のコンピューター上で処理可能なテキスト保存の形式をとった。

相手によっては随分と精力的に文通の続いた生徒もいた。特に、インターネット上の文通に限らず、通常の普通郵便で返事をもらった生徒もいた。文通相手の写真も同封されており、生徒には大きな励みとなったはずである。

5. その他のソフトの利用

5.1. ホームページの作成とメールのリンク

国際交流をしていく際に、ホームページを準備して、交流そのものが反映されるようなページ作りをすると、かなり深い理解が得られ、また新たな発展性があることを感じた。当初、E-mailのみで交流を行っていたが、平成7年度12月上旬より、ホームページを準備した(http://www.bekkoame.or.jp/〜abcd/index.html)。このページには、GIEPFのねらいなどの説明と、どんな相手がこのホームページを見てくれたのかを明らかにできるような質問のページを準備した。また、今後日本や日本文化についての情報発信がしやすくなるよう、重要な機関や情報源と成り得るような資料のリストのホームページ（K-12　Teacher's Resources）を準備中である。ホームページを訪れてくれた各交流校の先生からも感想やリンクを張ることの許可が得られ、まずは順調な滑り出しであった。文通をしている海外の生徒の中には、もっと日本のことが知りたいという声が多い。今後は生徒の自己紹介や英語の授業で取り組んだ課題などをテキスト化しWWWへ載せていくことや、日本、日本文化の紹介のホームページ作成を考えている。

6. 課題

6.1. 現時点での課題

本年度の実践上の課題について述べる。まず生徒あての英文と、生徒の現時点での英語力との間に大きな開きがあることである。一年生の二学期までの学習内容では、完了形や現在進行形など自由自在に使用している手紙の内容を把握することが困難であろう。また交流の初期の段階においては、どうしても自己紹介が多くなる。海外の生徒が今興味あることを書いてくれるのだが、気に入っているミュージックバンド等の固有名詞やスラングの使用が多く理解し難いと言える。さらに英文そのものに誤りが多いことも問題であった。代名詞の“I”の変わりに“i”が代用されていたり、全て大文字が使用されていたりすることもあった。スペルミスも多く見受けられ、ピリオドを使用しないで、本来つなぐべきでない二文、三文が連なっている手紙もあった。

生徒個人が各自のメールアドレスを持っていない為、交流相手のE-mailが担当の教員の

もとへ全部集まってくるのも問題である。まずE-mailの内容／差し出し人／配送先を確認した後、プリントアウトする作業がある。次に前述した英語力とE-mailの開きをある程度補う為、箇条書きで解説を入れたこともあった。次に生徒が作成したテキスト文章をインターネットへ接続できるコンピューターで取り込み、メイルソフト上で体裁を整える作業がある。順調に作成されフローピーに適切に保存される場合は良いが、ソフトウエアーに不慣れな為、保存されていなかったりしたこともあった。

通常の授業と平行して、本プロジェクトを実践した為、生徒に十分な時間を保証してやれなかった。家庭にコンピューターがある場合は自宅での作成も可能であるが、本校コンピュータールームの使用時間と授業時間のみでは十分な内容のE-mail用の英文作成ができなったであろう。

相手の反応や返事を出してくれる頻度までは予測がつかず、E-mailを発送したのに返事がなかったりしこともあった。また逆の場合もあり相手から何通ものE-mailが来ているのに返事が出せないこともあった。

6.2. 今後の課題

今後、迅速な反応とより深い交流を目指すためには、是非とも生徒にそれぞれアクセス権を与える必要がある。交流をしている相手の学校の中には、生徒自身のメールアドレスを取得させている学校もある。もちろんアクセス権の取得に関しては、倫理的な問題も含まれてはいるが、十分な端末機器を準備してやることが今後の重要な課題であろう。

今回の交流では個人的な自己紹介の英文が中心となったが、次回以降のプロジェクトではより深い文化交流にまで高めていきたい。教科書の学習内容にはアメリカ合修国、イギリス、カナダ、オーストラリアを中心に文化的な事象の紹介もある。せっかく世界各地にインターネットを通じて知り合えた同年代の中高生の知り合いがいるのであるから、もっと日常のことでなかなか知ることの難しい文化や風習についての意見交換ができれば、学習を深め、異文化理解の上でも大きく貢献できることとなるであろう。例えば、今回のE-mailの内容から抜粋して、生徒に紹介した文化的な内容の一つに、イギリスの女子生徒に人気のあるスポーツのnetballがある。これは「1チーム7人で行うバスケットボールに似た球技：英国の女子が愛好」と『リーダーズ英和』は記述している。一方、オーストラリアでもこのスポーツは子供たちによって愛されている。森本(1995:208-209)にもnetball(netta ball)は載っており、「小学生(8〜10歳)用に簡易化されたバスケットボール」とある。以下の資料はhttp://www.ausport.gov.au/aisnet.htmlのWWW上の情報である。netballがどのように導入されたのか歴史的背景までよく分かる。

Netball at the Australian Institute of Sport

History of Netball

The game of netball originated as an offshoot of the game of basketball. Basketball began in the USA in the 1890' s. Basketball was taken up as a sport in England as well, and by 1897 ladies were playing the game on grass courts.

In 1898 some changes were made to basketball and this resulted in the first appearance of the game of netball.

Netball was brought to Australia by English school teachers and there are records of inter-school games being played as early as 1913. In 1927 the All Australian Women's Basket Ball Association (AAWBB) was formed and promoted seven-a-side netball. There was no standard rules at this time and there was a nine-a-side and a five-a-side version of the game. On an Australian tour of England in 1957 discussion about the standardisation of the playing rules lead to the formation in 1960 of the International Federation of Basketball and Netball Federations (IFNA). International tournaments were suggested at this meeting to be held every four years. The first of these World Championships was in 1963. In 1970 the title All Australia Netball Association was adopted and the game was officially named "netball". Recent rule changes have meant that the modern international game is extremely fast and exciting.

このnetballに関する情報の発展の仕方から分かるように、E-mailの文通から知り得た情報についてWWW上の情報を検索することは非常に深まりのある学習へと発展する可能性を秘めている。もちろん教師が情報を取捨選択し教材として扱ってもよいが、生徒が直接知り得た場合の満足感は一段と大きな英語学習の動機づけとなろう。

7. 将来的な展望

小論では紙面の都合上触れなかったが、インターネット上のその他のサービスを利用するとさらに英語の学習を深めていくことができる。E-mailの場合、基本的には情報の発信は1対1の対応である。ところが、ニュースグループという電子会議室にあたるサービスを利用すれば、複数で意見交換をすることも可能である。またWWWの出現でやや陰は薄くなったものの、ゴーファーサービスもテキスト中心ではあるが大いに活用できる。このゴーファーとは村上(1994:69-70)の紹介にあるように1991年にミネソタ大学で開発された。開発の目的は大学の組織が別々に持っていたサービスを統合して、よくシステムを知らない学生でも使用できるよう開発された。ちなみにゴーファー(Gopher)とは地中の穴に住む、北アメリカ産のジネズミのことであり、インターネットのゴーファー(Go far)とはこれをもじったものである（村上1994:70)。

その他、今回の交流で利用できなかったものの1つに、CUSeeMe というものがある。これはコンピューターにテレビカメラをつなげて遠隔地へ映像を送るソフトウエアーである。下記のE-mailはStephen Titchenal氏(Media Specialist) Cleveland Heights High Schoolからのものである。

Thanks for writing to us. I have shared your message with a number of teachers at Oxford School. One of them may have written to you already. (Let me know

if they haven't) We are just getting our connection at the school up and running so there are still problems to work out.

I shared Daisuke Hara's personal message to Mike and hopefully he has already written back. The Cub Scouts that created the Oxford page are working on a message to your class. (We only meet once every two weeks so it may take a while.) :)

We are planning a communication activity for the boys on Wednesday November 8 from 7:00PM - 8:15PM eastern standard time. I'm not sure your exact time zone but that may translate into a time you are in school. If you have any interest in setting up a real time chat or CU-SeeMe session, we would be excited to "talk" with you. Even if you cannot participate with us "live" you will definately be receiving messages from the boys that night. Are there any questions you would like them to answer?

----------Stephen Titchenal, Media Specialist----------
Cleveland Heights High School , 13263 Cedar Road, Cleveland Heights, OH 44118
Email: S_Titchenal@tiger.chuh.cleveland-heights.k12.oh.us Home Page: http://tiger.chuh.cleveland-heights.k12.oh.us/CHHS.html

本年度実施したE-mailで知りえた双方の情報について、写真を取ってE-mailに添付したり、素材を集めてHTML化しWWWのサーバーを準備すればかなりの内容まで情報を発信していくことができる。また機器を準備し、CUSeeMe等のソフトウエアーを活用すれば、映像までも送ることが可能となる。

8. まとめ

以上、本年度の実践と発展的な学習への示唆も含めて今後の課題等について述べてきた。インターネット上のサービスがほとんど英語で行われるため、教師自身にとっても、研究上の情報を検索したり、教材のもととなる情報を求めることができた。WWW上の情報を探索すると、思わぬ発見をしたりすることも多い。またホームページを見て頂いた方々から突然E-mailを貰うこともあった。このホームページは、本年度実施したGIEPFを筆頭に、いくつかの部分に枝別れしている。普段の学習の成果も、テキストの形で残すことができることと同時に、その学習ぶりが日本に限らず、世界各地の人々に見てもらえる喜びは、生徒にとって大きな学習への意欲づけとなっている。平成8年2月現在、教科書の題材をもとに和製英語の学習をホームページ上のリンクさせた場所に準備中である。また今後は日本の紹介を英語を通じて行う予定である。

なお本年度の実践を進める上で、インターネット上の技術的な諸問題に関して、西山成信先生には度々助言と指導を頂いた。記して深く感謝したい。また山田政美先生には原稿の段階からの指導・助言を頂いた。特に記して感謝したい。

（わたなべ　むつひろ・島根大学教育学部附属中学校英語科）

参考文献

『リーダーズ英和辞典』研究社。1983。［『リーダーズ英和』］

朝尾幸次郎(1995),「英語教育ネットワークIntercultual E-mail Classroom Connection 」
『英語教育』第44巻9号, 1995年10月号、大修館書店、p. 89。

村井　純(1995),『インターネット』岩波新書。岩波書店。

村上健一郎(1994), 『インターネット』岩波科学ライブラリー17。岩波書店。

森本　勉(1994),『オーストラリア英語辞典』大修館書店。

WWWの情報

Netball at the Australian Institute of Sport　http://www.ausport.gov.au/aisnet.html

インフォーマント

Geoff Love　Penpals@gdes.demon.co.uk

Stephen Titchenal　S_Titchenal@tiger.chuh.cleveland-heights.k12.oh.us

渡部睦浩(わたなべむつひろ)

E-mailアドレス

watamu@botan.shimane-u.ac.jp

PXK12035@niftyserve.or.jp

ホームページ

http://www.bekkoame.or.jp/～abcd/index.html